

自分の出来ることを通して日本の経済に貢献したい。  
そして、貧しい国のことを、もっと日本人に伝えていきたい。



古美術店「夢工房」勤務

アザド マハムド アブル カラムさん

■カラムさんは日本語を勉強するために来日されたそうですね。もとも、日本に興味があったのですか？

私の母国はバングラデシュですが、私の家の周りに日本人が何人か暮らしていて、大学生の頃知り合いになりました。大学ではビジネスと経済関係の勉強をしていましたが、卒業しても、人口が多い私の国では仕事が見つからないので、海外に出たいと思っていたのですが、そのときに思いついたのが、日本に行って日本語を勉強しようということだったんです。

■日本に初めて来たときの印象はいかがでしたか？

日本に来る前、日本人と言えば昔のサムライのイメージで、みんな着物を着ていると思っていました。英語が通じなくて言葉に不自由しましたが、安全、安心で生活しやすい所なので、だんだんと日本が好きになりました。それで、この国で仕事を探そうと思ったのです。

■日本語はどれくらい勉強したのですか？

来日して最初に行ったのが神戸です。YWCAの日本語コースで1年半ぐらい勉強しました。1日のうち2～3時間寝るだけで、ずっと勉強していましたね。学校では日本語の上達が早いと褒められて、6ヶ月後には普通に会話できるようになりました。

■今はご家族と一緒に暮らしておられるのですか。

バングラデシュで結婚し、先に私が日本に来て、3年後に妻が来ました。最初は習慣の違いに戸惑って苦労したみたいですが、今は日本が大好きで、日本語も学校に通い、私よりはるかに上手くなりました。

■そこから、どのようにして今の古美術商の仕事に出会われたのですか。

ある日本人の紹介で、滋賀の会社の社長さんと知り合って最初の就職をしました。仕事はバングラデシュに工場を造ってメンテナンスするという内容でしたが、自分の考えと仕事の方向性が合わないと思うようになりました。そこで違う仕事を探しているとき、天津で古美術商をしている「夢工房」の社長に出会い、日本の骨董品をネットで海外向けに販売する仕事を始めたのです。今は、天津市桜野町にある「夢工房」の工房で働いています。

■もともと骨董には興味があったのですか。

はい。骨董は好きでしたね。最初に日本の骨董品を見たときはびっくりしましたが、「夢工房」の社長と先輩が子どものように教育ててくれました。ですから、今はこれがどの時代のものなのか、少しずつ分かるようになっていきます。時代が分かれば、仕事をやっていくことができます。

■大学でビジネスと経済の勉強をしていたということですが、日本の経済にも興味を持っていたのですか？

そうですね。今の仕事は日本の骨董品を海外に紹介して販売する仕事ですが、海外からバイヤーが来て買い付けるという国際的な流れがあるので、日本の経済を良くすることに繋がっていると思います。私はあまり深い問題は分かりませんが、自分に出来ることを通して、日本の経済に貢献したいと思っています。

■滋賀県の住み心地はどうですか？

今まで住んだ所で一番好きですね。空気もきれいですし、琵琶湖の眺めもとても良く、特に奥琵琶湖に行くと気持ちが良くなります。それ

●プロフィール●

バングラデシュ出身。大学卒業後、日本語を学ぶため2006年7月に来日。神戸のYWCAで約1年半日本語を勉強し、周りの人から語学力を認められるようになる。就職をきっかけに2008年1月から滋賀で暮らすように。そこで天津市の古美術商・吾日堂の会長との出会いから、京都の古美術店「夢工房」へ就職。日本の骨董品を海外向けに販売する仕事を手がけるようになる。同郷の妻のアザドさんとともに、天津市在住。

に、日本人は約束の時間や仕事を仕上げる納期などきっちり守るので、働きやすいです。私の故郷は人も車も多く、番号も守らないので渋滞がすごいんです。その点、きっちりしている日本の生活は私に合っていると思います。

■逆に日本の気になるところはありますか？

外側がきれいでも、中が片付いていない家が結構多いように思いますね。おじいさん、おばあさんが守ってきた昔の家は外も中もとてもきれいにされています。忙しくて時間がないといいますが、片付ける時間はほんの10分でいいんです。おじいさん、おばあさんが守ってきた習慣を続けてほしいなと思います。

■今後、やってみたいことはありますか？

最近考えているのは、日本人に世界のことを伝えたいということです。日本人もよく海外に行きますが、アメリカやオーストラリアなど、だいたい経済的に同じレベルの国に行きますね。私は、もっと貧しい国に目を向けて、その国の人たちがどんな暮らしをしているか、何を感じているかを見てもらいたいです。そうすれば、今の日本の豊かさがどれだけ恵まれたものかが、もっと実感できると思います。なかなか、仕事の出会いの中で伝えるのは難しいですが、身近な友達からでも、少しずつ伝えていきたいですね。